

# 分配的正義とその批判 ーロールズVSノージッカーー

群馬大学社会情報学部

井上 彰

# 分配的正義のターゲット

分配的正義というと・・・

- 財(資源)の再分配
  - とくに富者から貧者への資源移転を促すことの正当性を規定する
- といった理解

間違っているわけではないが、部分的  
ジョン・ロールズの分配的正義の射程は広い

# ロールズの出発点

## ロールズが置く前提

- ①われわれは自由かつ平等な存在  
(そうでありたい、そうあり続けたい存在)
- ②社会では利益衝突がみられるが、単独で生きるよりずっと多くの利益が相互に得られる
  - 正義の状況the circumstances of justice  
資源の穏やかな稀少性と限られた利他心(相互無関心mutual disinterest)



**社会的協働**social corporationが不可欠

# 社会的協働のための分配的正義

社会的協働を確固たるものにするのは…

すべての当事者が承諾する(そしてそのことを知っている)分配的正義の原理



**社会の基本構造**(制度)をよりよく秩序づける

【具体的には】

権利と義務を割り当て、社会的協働の利益と負担を適切に分配する制度配置

# 誰もが承諾する？

どうしたら誰もが承諾する分配的正義の原理が得られるのか？

— **公正な手続き**に基づいて選定する

【問い】いかなる公正(fairness)が求められるのか？

①形式的公正：利益に対する相応の負担

②実質的公正：道徳的に**恣意的な**(arbitrary)要素の影響も勘案→できるかぎり除去

# 適理的に受容可能な原理

実質的公正の手続き



個人の能力and/or社会的地位の点からみて最も恵まれない者the least advantagedを含むいかなる者にとっても、**適理的に受容しうる**  
**reasonably acceptable**正義原理の選定

※その手続きを表現するのが**原初状態**original  
**position**の構想

# 原初状態

正義原理の一度きりの選択状況

初期状態 the initial situation

原初状態は初期状態の一種

われわれを無知のヴェールの背後に置くもの

自分の能力や社会的地位についてわからないものの、  
社会に関する一般的知識については把握している特殊  
な情報の制約状況

– 自然的偶然性と社会的偶然性の影響を排除

# 反照的均衡

原初状態で選定された正義原理

— 本当にわれわれが恒久的に支持しうる正義原理か？

**反照的均衡reflective equilibrium**: 特定のケース(e.g. 宗教的寛容や富の分配)をめぐって熟慮された判断(直観的判断)とのマッチング

— 2つの方向性

- ① 直観の修正
- ② 初期状況の修正



# 正義の2原理

1. 自由を平等に最大限保障すべきことを謳う原理the principle of greatest equal liberty
2. 社会・経済的不平等の正当化要件として
  - A) 公正な機会均等fair equality of opportunity原理  
職位や立場に就くチャンスは、出身階層に関係なく開かれているべきだとする原理
  - B) 格差原理difference principle  
最も恵まれない者に最大限の利益を与えるべきだとする原理

# ロールズの「正義の2原理」

**第1原理**——各人は、すべての人にとって同様の自由体系と両立しうる最大限の基本的諸自由への平等な権利をもつべきである。

**第2原理**——社会的・経済的不平等は、次の2つの条件を充たすように配置されなければならない。

- (a) 公正な機会の均等という条件の下で、すべての人に開かれた職務や地位に伴うかたちで、そして
- (b) 最も恵まれない人々の最大限の利益となるように。

**第1の優先順位の規則（自由の優先）**——正義の諸原理は、辞書的順序に従ってランクづけられなければならない。それゆえ、自由は自由のためにしか制約され得ない。

**第2の優先順位の規則（効率性と厚生に対する正義の優先）**——正義の第2原理は、効率性の原理や、利益の総和を最大化する原理よりも辞書的に優先する。そして公正な機会の均等は、格差原理に優先する。

[John Rawls, *A Theory of Justice*, Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1971, p. 302 (川本隆史ほか訳『正義論 改訂版』紀伊國屋書店、2010年、403-4頁)]

## 2つの優先規則

第1の優先規則: 第1原理 > 第2原理

第2の優先規則: 公正な機会均等原理 > 格差原理

なぜ以上の規則が採択されるのか？

1. 自由かつ平等な存在でありたい者は、自由を犠牲にして経済的平等を実現することをよしとしない
2. 格差原理を優先すると、最も恵まれない者が利益を得る機会のなかでも、より望ましいと言えるような機会(選択肢)が制限されてしまう可能性

# 基本(的社會)財 primary (social) goods

自由や社会・経済的平等の指標としての・・・

## 基本財(善)

- 諸々の権利や自由、機会、権力、富、自尊self-respectの社会的基礎

合理的な人であれば、より多く手に入れたいと思うもの

- あらゆる目的の手段 all-purpose means

# ロールズの功利主義理解

## 功利主義の最たる特徴

目的論的理論teleological theories

- 善は正義とは独立に定義される
- 正義・・・その善の最大化→行為や政策

## 功利主義に当てはめると

- 功利主義にとっての善・・・幸福(欲求充足)
- ※ 功利主義にとって幸福は単一の善
- 功利主義にとっての正義・・・功利の原理

# ロールズの功利主義批判

なぜロールズは功利主義を批判するのか？

①人生目的(各人が追求する善)の多様性 pluralityを無視する点

②分配を直接的に問題にしない点

③**人格の別個性**the separateness of personsを尊重できない点

- 社会のあり方についても、一個人の合理的選択に還元できてしまう点(たとえば不偏的観察者 impartial spectator)

# 質疑応答および議論(ここまで)

質問があればどうぞ

ちょっとだけ議論(時間があれば)

- あなたは原初状態の構想(無知のヴェールの背後での正義原理の選定手続き)を受け入れることができますか？
- あなたが現に最も恵まれない人だとしたら、ロールズの議論をどう評価するでしょうか？

# ノージックのロールズ批判1

## ロールズ正義論の出発点に対して

- なぜ社会的協働を前提とするのか？
- 社会的協働なき状態での、人々の権原がなぜ無視されるのか？

当事者が、結果状態の分配にしか目が行かないように設定

- 自己利益を志向する人間→社会的協働を志向する人間



## ノージックのロールズ批判2

ロールズ正義論を支えるのが、自然的偶然性は道徳的に恣意的であるという観点

この点に絞ってのノージックによる批判

- ①格差原理の適用結果によるシェアの差も、道徳的に恣意的なのでは？
- ②第2原理を支える背景的主張の根拠、すなわち「不平等を正当化する適切な理由を示さない限り、平等であるべきだ」とする根拠は？
- ③なぜ自分に関するすべての知識は、道徳的に恣意的なものとして剥奪されないのか？なぜ合理的選択能力については、無知の規定から外されるのか？もし当該能力が道徳的重要性を示しているのであれば、同様のことがなぜほかの生来の能力についても言えないのか？

# ノージックのロールズ批判3

## ロールズ正義論を支える道徳的直観

すべての人は生来の能力等の自然資産natural assetsへの等しい権原をもっている、という**共有資産common (collective) assets**の考え方

しかしこのことは人格の別個性を尊重できないとする功利主義批判が、そのままロールズの議論にも跳ね返ってくることを意味しないだろうか？

# 議論

## 質問

- あなたはロールズ(の分配的正義の理論)を支持しますか？
- それとも、ノージック(の歴史的権原理論)を支持しますか？
- あるいはどちらの立場も支持しませんか？

自分がどちらを支持するのかについて(あるいはどちらも支持しないことを)、その理由とともに示してください。

## 【参考文献】

C. Kukathas and P. Pettit (1990) *A Theory of Justice and its Critics*. Cambridge: Polity Press. (山田八千子・嶋津格訳『ロールズ——『正義論』とその批判者たち』勁草書房、1996年。)

S. Freeman (2007) *Rawls*. London: Routledge.

S. Freeman (ed.) (2003) *The Cambridge Companion to Rawls*. New York: Cambridge University Press.

S. Scheffler (2001) *Boundaries and Allegiances: Problems of Justice and Responsibility in Liberal Thought*. New York: Oxford University Press, chapters 9 and 10.

須賀晃一・齋藤純一(編)(2011)『政治経済学の規範理論』勁草書房、第1, 2, 6章。